ぎんなんとモルモット

島村　和子

園庭の雑草園は春には蕗のとう・土筆・よもぎ・せり・のびる、初夏にはみつば・くわの実・ゆすらうめ、秋にはどんぐり、畑では苺・じゃがいも・玉ねぎ・さつまいも・落花生・茄子・ピーマン・とうもろこし……等が実り、子ども達の手による〝食べる〟体験が季節ごとに行われている。

九名の小さい幼稚園だが、田舎のありのまま の生活が出来「身近なものを食べる」体験が入園当初より多かった為、何物もまず「食べてみる」との子どもの思いは強い。

銀杏の葉が園庭を萌色に染めた秋のある朝、

U男「ぎんなん落ちてるよ」

M子「手で拾ってはだめっておばあちゃんが言ってたよ」

U男「なんでー」

M子「手がかゆくなってくさってしまうよ」

保育室で着がえをしながらそんな会話をしていた二人は、バケツとはさみ棒を持って銀杏の木の下に飛んで行った。

やがてバケツ一杯のぎんなんを拾った二人は「くさい、くさい」「これくさってるんじゃないの」「くさってて食べるの無理だよ」

その話を聞いていたR夫「先生、茶わんむしのぎんなんもこんなくさってるの」、K男「ぼく食べないよ、おなかいたくなるもの」。他の子ども達も加わってテラスではこのくさいぎんなんの扱いについて議論が始まった。

U男「くさいし、ぐちゃぐちゃなので食べるのはやめようよ」

M子「もっとくさらせると食べられるって、おばあちゃんが言ってたよ」

R男「どうやってくさらせるの」

M子「泥の中にずっーと埋めておくんだって

◀ぎんなんを拾う子ども達

さ」

U男「先生どうする、ぼく、くさっているのいらないからね」

教師の「Mちゃんのおばあちゃんの話のようにやってみない」との言葉かけでみんなで土の中に深く埋める。

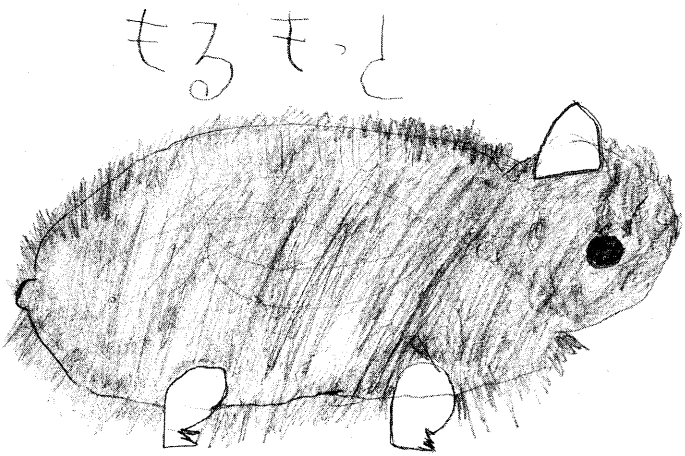
何日かしたある日、忘れずにいたM子、U男は土の中より「ぎんなん」を掘り出してみて、本当だ、おばあちゃんの言ったとおりだね」。土を落とし洗って真っ白になったぎんなんを、九名の子どもと二名の教師は丁寧に焼いて食べました。くさっていると思っていたぎんなんの硬い殻の下にあんなに柔らかい、しかも食べるとなんとも言えない甘味の出る実が入っていようとは想像もつかないことです。

ある日、U男が大切に飼っていたモルモットの「モルちゃん」が死んだ。入園当初は、ただ動くだけの「おもちゃ」と扱っていたモルモットであったが、最近では、自分の心が不安定になった時、遊びが一段落して次の遊びに移る合い間に相手になってくれる仲間のようになっていた。共に遊んだ日々が思い出されるのか「かわいそうに」「さみしいね」の言葉が子ども達から出て、死んでしまったモルモットの扱いについてU男は「葬式やろうよ」。

M子「泥の中に埋めるんでしょ」

U男「ぎんなんみたいに深く埋めるんだね」

子ども達皆で園庭のどんぐりの木の下に深く「モルモット」を埋めて「これでお花とお線香があればいいね」。花は園庭にあるものを摘んで、線香はM子が持ってくることで話し合いがついたようだ。子ども達は、「モルちゃんは天国へ行った」。U男は、「天国へ行かないもん、泥の中に埋めてそのうちくさって出てくるんだよ」



M子「ぎんなんと違うの、今度は掘らないの」
U男「じゃ、モルちゃんどうなるんだよ」
R男「くさったら天国へ行くんだよ」

幼稚園で「くさる」場面に出合うことは少ない。時として宝物のようにしてロッカーにしまいこんだ、花や、木の葉、実が忘れられ「くさる」ことはあるが、そのような経験をする子どもは最近では少ない。

むしろ自分の思いが周りの大人（親や教師）に伝わらず気持ちが「くさる」経験をする子どもが多いように思われる。

目に見えぬ「くさり」が子どものサインである場合もたくさんある。それが見える教師でありたいし、そんなサインを子どもが出せる、子どもとの関係でありたいと思っている。

（平塚市立城島（じょうじま）幼稚園）